



TITLE:

<書評>大野哲也著:『旅を生きる人
びと--バックパッカーの人類学』世
界思想社、2012年、2,300 円+税、
265 頁

AUTHOR(S):

別所, 裕介

CITATION:

別所, 裕介. <書評>大野哲也著:『旅を生きる人びと--バックパッカーの人類学』世界思想
社、2012年、2,300 円+税、265 頁. コンタクト・ゾーン 2014, 6(2013): 192-200

ISSUE DATE:

2014-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/198480>

RIGHT:

大野哲也著

『旅を生きる人びと ——バックパッカーの人類学』

世界思想社、2012年、2,300円＋税、265頁

別所裕介

本書は、「バックパッカー」というひとつの旅の形態を実践する人々の語りを糸口として、グローバリゼーションのもとで流動化する現代世界における「生き方」の可能性を探求するものである。現代の日本社会において、マスメディアや「個人旅行」を対象としたマーケットの形成によって「バックパッキング」がメジャーな旅のスタイルとして打ち出されるようになって久しいにもかかわらず、その営みを「社会的な実践」のひとつのバリエーションとして十全に位置付ける枠組みはいまだ存在せず、その社会的な意義が総体的に問われたこともない。著者はこうした現状を認識しつつ、現代日本を飛び出してバックパッカー生活を送る多彩な旅人を焦点化し、それらの営みを「ひとつのまとまりをもった社会的な実践」として位置付けていこうとする。

他方で、このバックパッキングという旅の実践は、メジャー化に伴う制度化やマニュアル化が進行する中で、その体験の個性によって、個々人の生に長期にわたる影響を及ぼしており、バックパッキングがもつこのような特質をひとつの構造的枠組みのもとで探求することは、現代日本の日常の生活世界に対して優れて反照的な考察材料を提起する。著者はこうした現代における旅の「消費」とその体験の固有性に関する内在的な論理を、実際のバックパッカーへの緻密な聞き取り作業によって明らかにしていく。

本書の事例部分は、著者が2004年から2011年の間に行ったアジア諸地域のバックパッカーズタウンにおけるフィールドワークをもとにしている。主要な対象国はタイ、ラオス、ベトナム、カンボジア、中国、ネパールとなっている。このほか、上記とほぼ同一の期間に行った日本に暮らす元／現役バックパッカーへのインタビュー資料が用いられている。本書の目次は以下のとおり。

はじめに ― 僕は、放浪の旅をしていた

第1章 「自分探し」のメカニズム

第2章 日本人宿コミュニティに生きる

第3章 商品化する「冒険」

第4章 リスクを消費する
第5章 二つの社会を同時に生きる
第6章 旅を生き続ける人びと
終章 バックパッカーが切りひらく地平
自転車世界紀行

- 1 趣味は散髪
- 2 ジュリアノ
- 3 エベレストの村
- 4 ギラギラの町
- 5 地上の楽園
- 6 変わり者

注

あとがき

謝辞

聞き取りをした日本人バックパッカー一覧

以下では、まず本書の内容を要約した上で、本書の資料と議論がもつ独自の意義をまとめる。そして最後に評者が抱いたいくつかの疑問点を指摘することとしたい。

本書は、序論にあたる「はじめに」と終章のほか、第1章と2章、5章と6章でそれぞれ著者が「移動型」と「沈潜型」、「移住型」と「生活型」と分類する旅のスタイルについて詳述され、その間に置かれた第3章と4章が、前二者と後二者の旅のスタイルそれぞれを橋渡しする理論的な視角を整理する役を果たしている。また、第1～6章の各章の終わりには「自転車世界紀行」という著者自身のバックパッキング体験がコラム形式で描かれ、ここでの記述から、調査者であり、同時に旅人でもある著者自身の旅の軌跡とそこで形成されてきた旅に対する独特の見方をうかがい知ることができる。

まず本書の導入部となる「はじめに——僕は、放浪の旅をしていた」では、著者自身の5年余に及ぶ世界放浪の旅を主軸とした人生遍歴が魅力的なエピソードとともに紹介されたあと、本書の目的が「バックパッキングをたんなる旅の一形態としてではなく、生き方という観点からとらえ直すこと」にあると述べられる。このように「旅」を「生き方」として捉えるために、著者はバックパッカーの旅のスタイルを4つに類型化する。第一が「移動すること」自体にこだわる「移動型」である。「可能な限り多くの国や町に行くことに喜びや価値を見出す」このタイプは、バックパッカーに対して多くの人が抱く一般的なイメージに当てはまるものである。次に「沈潜型」とは、気に入った町に長期滞在してその町に溶け込むことを喜びとするタイプである。ひとつの町での生活体験を重視する「沈潜型」は、「広く浅く」をモットーとする「移動型」とは対照的に「深く狭く」をモットーとしている。第三に挙げられるのが「移住型」である。これは「沈潜型」が昂じた結果生まれるもので、旅を契機として、自らが気に入った現地社会で継続的に暮らすことを望むにいたったバックパッカーを指している。最後に、どこにも根を張らず、「旅を

生き続ける」という困難な道を選択するバックパッカーの類型として「生活型」が提起される。このタイプのバックパッカーには、「移動型」や「沈潜型」が保持する日本社会への復帰願望もなければ、移住型のように現地での定住に重きを置くわけでもない、漂泊の生き方をあくまでも貫こうとする人々が当てはまる。

著者は以上の4類型があくまでも便宜的なものであり、各タイプの境界線上に位置する旅人の存在を排除するものではないと断りつつ、これら4類型が旅の経験の深まりとともに段階的な遷移のプロセスをたどると見ている。この段階的な遷移は、個々のバックパッカーが持つ「自分はどのような旅人になりたいか」という志向性に応じて分岐し、「自分らしい旅のスタイル」を身に付けていく過程として現れる。このことを、著者は「旅によるアイデンティティの刷新」と呼び、「旅の経験」と「アイデンティティ」が連動するその具体的なメカニズムを、43名（うち男性30名、女性13名）の旅人に対する聞き取りを主軸とした具体的なフィールドワーク資料から明らかにしようとする。

第1章では、「自分探し」という自己像にかかわる言葉を手掛かりとして、バックパッキングという旅のスタイルが支持される理由を移動型バックパッカーの旅の実践から紐解いていく。ガクン、ナッチャン、ヤギ、タク、コーイチといった個性的な旅人との対話から、大陸から大陸へと移動していく彼らが、異文化との直接的な接触とそこでの喜怒哀楽の経験から自己の人間的な成長と変化を体験していることが示される。この異文化に開かれた「面白さ」がバックパッキングという旅の醍醐味であり、そこで得られた経験の価値を「真正なもの」として認める心性を彼らは共有している。

だが一方で、そうした真正な経験を通して成長していく自己、という右肩上がりのイメージは、著者が「前進主義的価値観」と呼ぶ、資本主義社会の論理に適合的な通念へと回収されていくものでもある。旅という「自分のやりたいこと」に専念してきたバックパッカーは、日本社会への復帰に際しては「一般の日本人」とは異なる回路をたどって獲得された「ユニークな私」のイメージを戦略的に資源化し、就職や進学にそれを活かそうとする。この意味で、バックパッキングという旅のあり方は、自らのアイデンティティを最終的に日本社会に適合的なものへと再調整する手段ともなっている、と著者は分析する。

第2章では、「バックパッカーズタウン」と呼ばれる特定の場所に集まる沈潜型のバックパッカーを対象として、彼らの一か所に留まろうとする旅の実践に見られる経験のリアリティと、そこから導出される「現地経験」の限界と可能性が議論される。具体的には、アジアの代表的なバックパッカーズタウンのひとつであるネパール・カトマンズのタメル地区が取り上げられ、その形成の過程と、そこで長期滞在する日本人バックパッカーの日常行動が描写される。ここで登場するタスロー、トモといった沈潜型の旅人は、移動型のバックパッカーが真正な体験として尊ぶ「冒険的な経験」を必ずしも望んではおらず、「日本人宿」という日本人バックパッカーに最適化された場所を拠点として、自分が気に入った町に住み込んでいくことに喜びを見出す。だが、この沈潜型の旅の営みもまた、日本の主流的価値観である「前進主義」の呪縛から逃れえていないと著者は分析する。現地に長く沈潜すればするほど、社会復帰が容易ではなくなるというジレンマから彼らもま

た解放されていない。また、構図をひいてみたときには、沈潜型の旅人の存在が契機となり、各地を移動する日本人バックパッカーの旅のあり方が「同じルートをたどり、同じ宿に泊まる」という画一化につながっていくという。

上述の移動型と沈潜型は、日本的なものが集積した日本人のたまり場を旅行先に求めつつも、同時に強烈な異文化経験を熱望している、という点で「二律背反性」を抱えており、それが日本人宿のコミュニティを強化し、再生産していく役割を担っている。このことは、すべてがお膳立てされたマス・ツーリズムとは異なり、「常道を外れ」「現地の文化に浸る」(エリック・コーエン) ことを重要な旗印としてきたはずのバックパッキングが商品化されていく過程と軌を一にしている。こうした問題を俎上に載せる第3章では、まず日本の海外旅行史の中にバックパッキングが登場してくる過程が紐解かれた上で、ガイドブックやスマートフォンなどのツールによって変容する現代のバックパッキングに見られる「個人化」の傾向が検討される。そこでは、バックパッキングがマス・ツーリズム化していく中でも、個々のバックパッカーが求める「自分自身にとっての経験の真正性」を担保する自由裁量の余地は残されており、その空間を用意する現地社会とバックパッカーの間で「安全な冒険」が共犯的に生み出されていることが示唆される。

他方で著者は、こうした一連の商品化を厭う心性がバックパッカーの内部に醸成されていく側面にも注意を払う。第4章では、「安全な冒険」に反旗を翻し、バックパッカーのコミュニティ内で高い威信を獲得することのできる「危険行為」にいそしむバックパッカーたちの心性が描写される。それは、「バグダッド潜入」という「リスク消費」の旅を志向する日本人バックパッカーの姿であり、同時にそれさえもが「定番ルート」として商品化の道をたどっていく過程が描かれる。ここで登場する「A」は、そうしたリスク消費に失敗したひとつの典型事例であり、著者はA自身の苦渋に満ちた旅の経験もまた、「重層化した語りの構造」の中で自己のアイデンティティを刷新するひとつの手立てとなっていると指摘する。ここで著者が強調するのは、「ユニークな自分」を生み出すバックパッキングの持つ社会的効用がリスク体験の成功者によって増幅されるとともに、これに失敗した事例、すなわち「テロリストによる殺害」や「刑務所への収監」という取り返しのつかない事態によっても、「危険で冒険的」という真正な経験のイメージが新たに補強され、バックパッキングという行為全体に対してプラスに働く、という相互補完サイクルの存在である。そしてこのサイクルが作動する限り、リスク体験の如何にかかわらず、旅のマニュアル化と制度化は容赦なく進行していくことになる。

第5章ではこうしたサイクルに迎合しない道として、現地に移住することでバックパッキングのその後に開ける可能性を模索する人々の姿が描かれる。本章では舞台を再びカトマンズのタメル地区へ移し、かつてタメルをさすらった日本人バックパッカーが、自らの経済的基盤を確立するために経営者として観光産業に参入し、そこでバックパッカーとして培った「旅人の機知」を効果的に援用しながら、日本にも現地にも完全に軸足を置ききらない生き方を主体的に選び取っている様が描かれる。彼ら移住型のバックパッカーは、内面に旅人としての「真正な経験」への志向性を宿しつつも、日本社会への完全回帰の道を自ら絶つことで、前進主義的価値観への自発的な従属とは異なる道を開く。そこで実現

されるアイデンティティとは、「あらゆる社会制度を自分の都合の良いように取捨選択しながら、母社会と移住社会を同時に生きるという生活戦略」の中に現れるものであり、それはひとつの社会に完全に包摂されることを回避する実践的な知恵によって補完されている。

第6章では、タイ北部の農村・パイに築かれたバックパッカー・コミュニティにおいて「旅を生き続ける」ことを実践する生活型バックパッカーに焦点が当てられる。2つの社会に生活の基盤を築くことで自分らしさを実現している移住型バックパッカーとは異なり、生活型バックパッカーは、日本社会への回帰を拒否するのみならず、移住社会の経済体制に完全に包摂されてしまうことも拒否する。彼らのそうした「どこにも根を張らない生き方」を可能にしているのが、「旅の技法を昇華させた生活の機知」と著者が呼ぶものである。それは、タイのビザ制度の盲点をついたり、子供の在留資格のために出産場所を調整したり、移動を制限されたタイ国内のマイノリティとの補完関係を築いたりする、長期のバックパッキング生活を潜り抜けた者のみが獲得する身のこなしであり、鍛えられた工夫である。移住型バックパッカーが旅から得た機知を現地での経済活動に振り向けるのに対して、生活型バックパッカーの「旅の機知」は「制度から自由であること」に最大の価値を置く。彼らの生の技法は、国家による統制・管理の網をすり抜け、その裏をかくために存在するのであり、その実践そのものが「自分らしくあること」につながっている。最後の終章では、現代世界におけるバックパッキングの可能性と限界が総括される。まず議論の前提として、著者自身はバックパッキングの反体制的な出自を重視する立場から、前進主義的価値観に親和性の高い移動型や沈潜型に対し、どっちつかずの生活実践を基調とする移住型、さらには前進主義を完全拒否する生活型により高い評価を与える。日本社会の主流をなす前進主義から遠く距離を置けば置くほど、その実践に価値を認めるというスタンスである。その上で著者は、移動型や沈潜型を全否定するのではなく、そこに認められる「生の多様化を生成する機能」に可能性を見出す。移動型や沈潜型、そして移住型が、最終的に主流社会の価値観に寄り添わざるを得ないとしても、旅で得られた経験は重要性を失っておらず、その後も個々の人生遍歴の中で多様な生の創造へと運用され続けていくからである。著者はこの創造的な旅の回路が、システム化された旅と、そのシステムを抜け出ようとする旅の双方に深く内在されているがゆえに、バックパッキングという「生の営み」には、人と社会の関係を再構築するダイナミズムが確かに息づいている、と結論づける。

以上のような内容を持つ本書は、日本というひとつの国家単位から飛び出した日本人バックパッカーを対象としながらも、グローバル化していく社会的場に組み込まれた個々人に生じる「異文化体験」を契機とした自己変革の可能性、という普遍的課題に独自の観点から踏み込んだ意欲的な好著である。また、著者が本書で「旅とアイデンティティ」の関係性に特に着目する理由は、「生きられた旅」と「その後の人生」とを、統合的な連続性を持った「生の営み」として記述する枠組みが存在しないことに対する問題提起とも受け取ることができる。

だが、本書の魅力は、現代の旅を類型化し、その全体像を強固な枠組みのもとで構造的

に位置付けようとした理論的な部分のみに宿るのではない。本書の真の魅力は、このような構造的な分析と並走する、著者自身の旅の経験の豊富さに裏づけられた「旅へのまなざし」にあると考える。5年と1か月の世界自転車旅行の合間に「南極点に立ち、北極点で泳ぎ、北米、南米、ヨーロッパ、アフリカ、オーストラリアの5大陸最高峰に登頂」した著者はバックパッカーの中でも懐深い経験を積んできた「猛者」であり、本書に登場する種々多様な「旅人の語り」を、自らもその旅の場を共有する「旅人」として分かち合える立場にあった。読者は、著者の調査先＝旅先における個々のバックパッカーとの長く密度の濃い対話の積み重ねを本書の端々から読み取ることができるし、語られない行間から、個々の旅人が背後に持つ、人知れない苦悩や葛藤、羞恥やためらいに満ちた「日常」の存在を感じ取ることも可能である。

ここまでがアカデミックな研究書としての本書への評者なりの評価であるが、ここで視点を変えて、本書を手にするのが人類学に関心を持つ者のみでなく、バックパッカー自身でもありうることを想定し、本書に対していかなる異なる読み方が可能であるのかを考えてみたい。私事ながら評者は今回、インドへの調査旅行（＝「フィールドワーク」という学術活動上の公式名をもった旅）に合わせて、旅先での移動中に本書を読み込む、という読み方をあえて選んだ。

評者には、自転車による大陸横断旅行を含むアジアを中心とした4年ほどのバックパッキングの経験がある。シャープの液晶工場やスキー場で派遣労働者として働き、1年をかけて北京からカルカッタまでの人力移動旅行を完遂して東京に戻り、輸行バッグとともに山手線に乗り込んだ自分が、周りのサラリーマンに比して何か特別な「オーラ」を帯びた存在であるような、そんな独りよがりの優越感を一人噛みしめていたことを鮮明に思い出す。結局、旅の中でもっとも強く印象に残ったチベットの生活にあこがれ、その後大学院を受験する際には「旅の経験の資源化」（本書49頁）によってバックパッキング生活の最大効用化を狙い、さらにその資源をアカデミズムの制度と組織に見合う形で適宜加工し、「チベット研究者」としてのより上位のアイデンティティを補完するにふさわしい位置へと貶めたりしながらも、評者自身の中では「旅での経験」が心の底に横たわる一種の根源的な力として形を変えつつ今日まで継続してきているように感じる。

そのような旅とアイデンティティをめぐる語り自体、本書が指摘する「前進主義の回収サイクル」に取り込まれ、その構造を強化する言説的な営為である。さらに「フィールドワーク」の名のもとに行われる公的出張が、知の権力性と結びついた「大きな物語」に接続する回路を依然として宿している、といった諸点に留意した上で、なおここで改めて指摘したいことがある。それは、評者のような元バックパッカーであり、現在でも「現地での旅の実践」という次元でフィールドワークとバックパッキングとの境目が覚束ない人間にとって、一回性の経験に満ちた旅が個々人の生き方に及ぼす長期的影響を、それぞれの「いま・ここ」を生きる瞬間の「力」として捉える、という本書の道具立てが鮮烈なインパクトをもって迫ってきた、という点である。

今回、旅先の移動中に本書を読み進めつつ、たどり着いた町のドミトリーで多種多様なバックパッカーと旅の経験をやりとりする中で、評者はあらためて、バックパッカーズ・

ホテル独特の高揚と不安に満ちた空気を共有する自分たちが、長い社会的実践の一部分を確かにいま・ここで生きている、という一種形容しがたい感覚を覚えた。大学院を受験して以来、評者の旅は「フィールドワーク」という学問実践の形に置き換えられ、その成果は「旅行記」ではなく「論文」として形になることが職業上要請されるようになって久しい。だが、こうしたことはもともと自らが「やりたいこと」として始まり、そこを原点として今日まで、その後の人生の変転に合わせて形を変えて継続されてきたものである。その意味で、可能態としての旅をいま生きている「私」は、同じドミトリーで旅を語る彼らと同じように、「やりたいこと」を原点として「旅の経験」の永続性を生きていく主体として横並びに並置されうるものである。

著者が終章で総括する「人生は旅だ」という言葉についての洞察は、このような「やりたいこと」を原点として内面的に方向付けられたベクトルを持続させていく日常的実践の営みと同義なのである。そうした意味で本書は、学術書としての意義だけでなく、調査者とバックパッカーという2つのアイデンティティを持った著者が、自らを超越的な「記述者」として調査対象との距離を置くことなく、目の前の他者と共有可能な「いま・ここ」の地点から「人間の生き方」について考察を深めていく過程を追体験する、というロードムービーのような独特の味わいを持っている。このことが、本書の魅力を倍増させ、ほかにないユニークな読み物としている最大の要因である。

以上、本書は上述のような意味で、2つの異なる読み方が可能な、稀有な魅力を持った「旅の本」であるが、最後に本書を読みながら抱いた若干の疑問点についても触れておきたい。すでに指摘したように、本書ではバックパッカーの4類型を、もっとも一般的に通用するイメージである移動型を起点として、グラデーションのように旅の経験が深められる過程として分析していくのであるが、18年間も日本とバックパッカーズタウンの往来を続ける沈潜型のタスローや、すでに旅行先に長期にわたって生計手段を確保している移住型、さらに「意志と決意をもって『前進しない』」生き方を貫徹している」とまで形容される生活型の人々全体を包含する概念としてバックパッカーという概念を使用してしまっているのか、という違和感は拭い去れない。言い換えれば、数十年もの長期にわたって旅を続ける人と、数か月で旅を終えて日本型サイクルに戻っていく人とは、形態的に「バックパッカー」という外見が見出せても、内面の質的にはかなり隔たりのある存在である、と考えざるを得ない。

実際に、今回評者がインドで出会った長くアジアを遍歴してきた日本人旅行者に本書を見せたところ、『バックパッカー』と『ヒッピー』は全く違う、後者はむしろパイのコミュニケーション〔第6章〕にいる人に当てはまるのでは」という声が聞かれた。すでに述べたように、著者が「バックパッカー」という言葉に、『やりたいこと』を原点として、旅の経験を長期にわたって生き続ける一群の人びと」を指すための拡張的な意味合いを認めているのならば、冒頭で本書における用語法としてバックパッカーの意味範疇を指定しておくべきではなかったか。こうした配慮によって、本書を手にする個々の読み手からの個人的な印象のずれを最小限にとどめることができたはずである。

次に、多くの事例において個々のバックパッカーがバックパッキングに参加する以前の

社会的属性が不問に付されているため、特定のバックパッカー・コミュニティの叙述において、彼ら内部の社会的関係性が不明瞭なまま、興味深い事例だけが先行して話が進められてしまった印象がある。バックパッカーの中には、トモのように医療業界で長らく働いてきた者もいれば、特に収入に結びつくような技能を持たず、年を重ねつつ大いなる苦悩に立ち向かっている 30 代後半の人々も多く登場してくる。手に職があるバックパッカーは社会復帰が比較的容易であるのに対し、後者はそうではなく、年齢とともに社会復帰も難しくなるという苦悩の深化を抱えざるを得ない。

著者はカトマンズ・タメル生成を精緻に描きながらも、他方で日本側からのバックパッカーの生成要因として事前の先行条件となっているバックパッカー自身の職業的属性に十分に注意を払っていないように見える。このことは、インフォーマントのブライバシーなど、接触上の複雑な問題もあり、にわかに指弾できる性質のものではないが、少なくとも「コミュニティ」と呼び得る集団を描く上では、バックパッカーの社会内部にある包摂と排除、もしくは位階の構造のような、社会関係の雛形をある程度提示すべきではないかと感じた。

たとえば「実験的なユートピア」として第 6 章に登場するパイにおいて、「共同体の調和を乱すところんが判断した者はヴィレッジを出ていかなくてならない」(190 頁)、「ルールは女性なら誰でも OK で、男だところんのメガネにかなった奴だけ。まじめな奴だけね。」(198 頁)とあり、基本ルールがない中でもところんという裁定者が存在することが示唆されている。コミュニティを仕切るところんが、村に住んでいい人間とそうでない人間を峻別する具体的な基準とは何なのか。その論理に多少でも触れる記述があれば、コミュニティの姿がより立体的に描けるのではないだろうか。特にパイについては著者自身が「ヴィレッジの外縁」として参加型実践共同体の核心に触れるような記述を行っているがゆえに、バックパッカー内部のタテ・ヨコのつながりが概観的にでも提示されていれば、という思いを強くした。

もうひとつ、上記のバックパッカーの社会範疇という問題系に絡んで重要かと思われるのが、バックパッカーとそれ以外の旅行者との「境界」あるいは「外延」の問題であろう。人生におけるひとつの特殊な経験の一形態としてバックパッキングがあるのであれば、これに隣接する諸領域、たとえば宗教の信仰に基づく伝統的な巡礼や、人気アニメに描かれた光景を実地へ見に行く行為を「聖地巡礼」と称して地方をめぐり歩くヴァーチャル先行型の若者たちの旅、そのほか「旅」と名はつかずとも、青年海外協力隊、ワーキングホリデー、ピースボート、留学、海外 NGO 活動など、長期の現地滞在を伴うこれらの社会経験は、組織性や目的性の点で異文化体験の規模や強度を異にするものの、概念的にも物理空間的にもバックパッカーの 4 類型と交錯する場を共有するものであろう。たとえば評者はチベット難民の調査をしているが、彼らもまた、短い者は数か月、長い者で数十年もインドでの仮暮らしの生活を送っている。彼らが蓄積する「異文化体験」と、バックパッカーのそれとの接点、もしくは決定的な違いは何なのだろうか、という疑問がよぎる。

本書で提示された 4 種類のバックパッカーを、「異文化へのなじみ方の度合」によって

グラデーション的に定位できるものであるとするならば、その異文化と睦みあうテクニックは、ディアスポラ状況にある他の集団においても共有されているものであろう。沈潜型の旅人が「町に住み込む」実践を通じて蓄積する発見の技法は、たとえば異郷の地で不利な状況に置かれているチベット難民にとっても同様に獲得されるべき重要な「生の技法」であろう。こうした見方が行きつくのは、バックパッカーの境界化によって内部を閉鎖的に一元化しない、多様なアクター間の「場の共有」と「旅という行為」を統合的につなぎあわせることを可能にする、新たな開放系のアリーナを構想することの必要性であろう。

以上のような疑問点は残るものの、本書が旅一般、観光一般に真正面からの問題意識を突き付けるとともに、「旅の経験」の本質を深く掘り下げることで、「フィールドワーク」という公的な旅の実践を行う諸分野の研究者に対しても、自らの足元を見つめ直す契機を与える優れた読み物であることは疑いない。

最後に余談だが、評者は研究テーマ上、中国とインドを頻繁に訪れるが、これらの地域での非・欧米系バックパッカーの勢力地図を見てみれば、減少する一途の日本人バックパッカーや、常に一定数をほこる韓国・台湾のバックパッカーといった常連を押さえ、近年ではチベット・ヒマラヤ地域やインドの地方都市を主要な目的地とする「背包族」と呼ばれる中国本土の漢民族青年バックパッカーが急増中である。評者自身の今回のインド旅行でも、バックパッカーのたまり場とされる北インド各地の安宿で彼らと接する機会を持った。彼らの間では『黒皮書』と呼ばれる個人旅行のガイド本が支持されており、これは『地球の歩き方』の中国版であるといえる。これに対応した「青年旅舎」と呼ばれるバックパッカー向けの安宿も中国辺境部で増加の一途をたどっている。

経済成長率が年率9%に達するという驚異的な右肩上がりの成長を続ける中国と、格差社会の定常化に悩む日本。著者の枠組みを援用するならば、このようなアジアのバックパッキングをめぐる非対称な現状とその背後にある「時代の転換期」とも呼び得る力関係の変動はどのように読み解けるだろうか。このような種々の期待を膨らませてくれる本書の登場をまずは祝しつつ、今後、著者が新たに発掘するであろう「面白そうなこと」にふたたび驚かされる日を待ちたい。